

この本の見方

5人の女性たちの伝記を生年順に掲載しています。

タイトルのページ

人物の名前
肩書
生没年
物語の導入の文章です。

人見絹枝
「言葉」を掲載しています。

コラムのページ

その人物に関連するテーマを解説しています。

新聞記者として絹枝が伝えたメッセージ

その人物の伝記や著書、記念館などを紹介しています。

これがわたしの生きる道！

伝記 日本の女性たち

3 文化・スポーツで活やく

目次

この本を開いてくれたみなさんへ
明治・大正・昭和時代の女性たち

目次

この本の見方

女子スポーツの発展につくした

人見絹枝

1907 — 1931年

新聞記者として絹枝が伝えたメッセージ

日本初の女性報道写真家として活やく

笹本恒子

1914 — 2022年

人が好き！ 恒子が写した肖像写真

あふれる愛と平和への祈りを絵にこめた

いわささちひろ

1918 — 1974年

ちひろにしか描けない子ども像

日本の映画文化の発展に力をつくした

高野悦子

1929 — 2013年

ミニ・シアターブームの先駆け 岩波ホール

日本のクラシック音楽を世界に花開かせた

中村紘子

1944 — 2016年

日本のピアノ界のパイオニア

伝記を読み、考えてみよう

46

45

38

37

30

29

22

21

14

13

6

5

4

2

人見絹枝



陸上競技選手

1907—1931年

女子スポーツの発展につくした

女性が足を出して運動するのは
みつともないという考えが根強かった時代に、
スポーツの才能を見いだされ、
日本女性で初めてオリンピックに出場した人見絹枝。
国内外の記録を数多くぬりかえ、
女性スポーツの歴史を切りひらいた。

日本にメダルを持ち帰って、
「女子に運動は必要ない」
という人たちを見返したい。
みんなにスポーツに関心をもってほしい。



一九二八年八月二日の午後二時二十五分、
ある女子選手が、オランダの首都・アムステルダムにある陸上競技場のトラックで、空を見上げていた。

「一度も練習したことのない八百メートル走の決勝の舞台に立つのだから、倒れるまでベストをつくすしか、勝つ方法はない。」

そう覚悟を決めたのは、一九二八年に日本人女性で初めてオリンピック出場をはたした人見絹枝である。

午後二時三十分、号砲が響きわたり、女子八百メートル走の決勝がスタートした。九人の選手がいつせいに走り出す。

初めは、先頭を走る選手にびたりとくっついて二位のポジションを保っていた絹枝だが、ひとり、またひとりとライバルにぬかされ、順位は六位に落ちてしまった。それでも「ハ

百米メートル走を死ぬ覚悟で走りぬく」という決意はゆらがなかった。

半分の四百メートルを過ぎたところで、絹枝は一気に追いついた。もう少しで三位の選手に追いつきそうだが、絹枝の体力は限界に達していた。足がなまりのように重くて、もう動かない。

絹枝は苦しみのなかで監督の言葉を思い出していた。

「足がつかれて動かなくなってしまうときは、とにかくうでをふりなさい。」

絹枝は無我夢中でうでをふった。そして、三位の選手を「ぬいた」と思った瞬間、目の前が真っ暗になった。絹枝はゴールと同時に地面に倒れこみ、自力で立つことができなかった。

しばらく休んでようやく体を動かせるよう

*1 八百メートル走

八百メートル走を走るタイムを競う種目。トラックの一周は四百メートルなので、二周分の距離を走る。

*2 オリンピック

四年に一度開催される、スポーツの国際大会。一九二八年七月二十八日から八月十二日まで、オランダの首都・アムステルダムで第九回オリンピックが開催された。アムステルダムオリンピックでは、女性の陸上競技への参加が初めて認められた。

*3 号砲

スタートなどの合図としてうちなす銃。

いわさきちひろ



絵本画家

1918 — 1974年

あふれる愛と平和への祈りを絵にこめた

小さいころから絵が大好きだった少女は、
念願がなって絵本画家・いわさきちひろになった。
その作品を思わせるやわらかな人柄ではあるものの、
胸にはかたい意志が秘められ、
平和への思いがいつも静かに燃えていた。



わたしはわたしの絵本のなかで、
今の日本から失われた
いろいろな優しさや、
美しさを描こうと思っています。
それを子どもたちに送るのが、
わたしの生きがいです。



*1 東京・練馬区の小さな美術館、そして長野

県北安曇郡の美術館では、色とりどりの草花
とあたたかな優しい絵がむかえてくれる。遊
ぶ子ども、母にだかれる赤ちゃん。この絵を
描いたのが、いわさきちひろだ。

いわさきちひろが生まれたのは一九一八年。
三人姉妹の長女で、東京の渋谷町で育った。

「うわあ、なんてきれいな絵!」

小学校に入る前のこと、ちひろは、となり
の家の子が見せてくれた雑誌「ゴドモノクニ」



のなかの絵に夢中になった。子どもたちがラ
ッパをふきながら虹の橋を渡っている。

(絵なのに、まるで夢を見ているみたい……)

ちひろは、物心がついたときにはもう、絵
を描いていた。家の前の道に、ろう石でこ

までも絵を描き続けていく。そのあとをたど
れば、母はちひろの居場所をかんたんに見つ

けることができた。学校でも友だちのリクエ
スト通りに絵を描き、クラスの人気者だ。体

を動かすのも大好きで、かくれんぼ、なわと
び、木登りも上手な活発な女の子だった。

十二歳で高等女学校に進学。ピアノをたし

なみ、スポーツも得意、ちひろの毎日は楽し
く過ぎていった。

なかでもやはり一番好きなのは絵を描くこ
とだった。十四歳のときには高名な洋画家に
ついてデッサンと油絵を学ぶようになった。

- *1 東京・練馬区の小さな美術館、そして長野県北安曇郡の美術館
- *2 長野県北安曇郡の美術館
- *3 渋谷町現在の東京都渋谷区
- *4 「ゴドモノクニ」一九二二年から一九四四年にかけて出版されていた児童雑誌
- *5 物心がついた幼児期、自分のまわりの人の気持ちやできごとが、なんとなくわかってくること
- *6 ろう石。岩石の一種。小さく切ったものが売られていて、子どもが地面や塀に絵を描くときに使われていた
- *7 高等女学校。女子の中等教育のための学校。現在の中学校・高等学校にあたる。四年制と五年制があり、ちひろが通った東京府立第六高等女学校は五年制